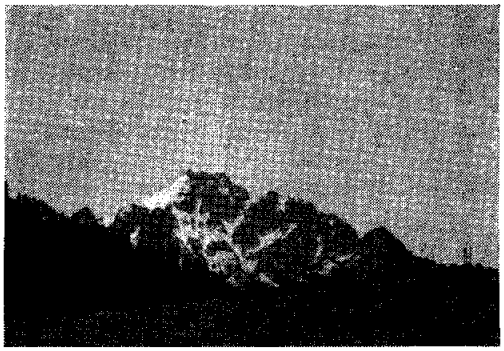


カザフ共和国からみた天山山脈

中央アジアのシルクロード紀行

― 天山北路の旅 ―

犬　飼　哲　夫

ユーラシア大陸（旧大陸）の心臓部、東は中国西南部から西方の乾燥アジアの名で知られる中央アジア諸国に連絡する道筋は、紀元前から中世紀まで中国と近東並びにヨーロッパ諸国との交易のルートで、東西の文化交流の重要な役割をなしていた。このルートは、明治十年（一八七七）にドイツ人リヒトホーフェンによって絹の道、すなわちシルクロードと名づけられ、歴史上有名になった。

シルクロードには二系統があった。その一つは天山北路、他の一つは、天山南路である。天山北路は蒙古から中国とソビエト連邦の国境にある天山山脈の北端を廻って、中央アジアのソ連配下のカザフ共和国に出るルートである。天山南路は中国の新疆維吾児（昔の新疆省）から天山山脈南部のパミール高原を廻り、アフガニスタン、さらにイラン、イラク、トルコ方面に通ずる。

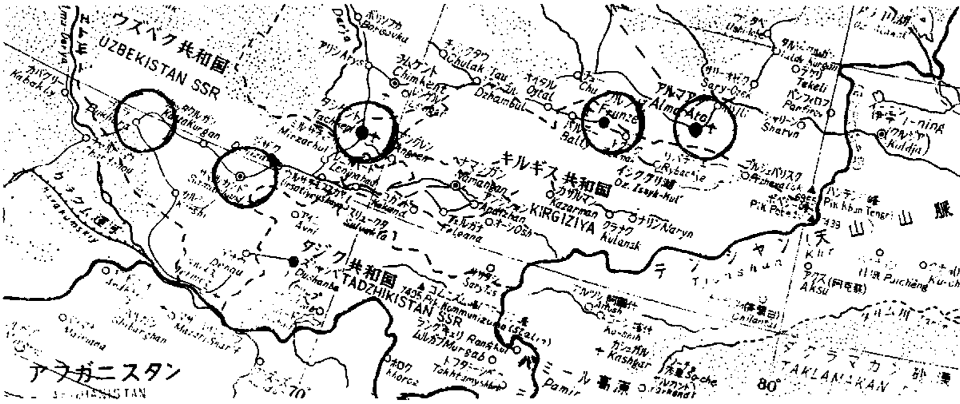
シルクロードには、パミールからトルキスタンに出て印度に通ずるルートも含まれていたが、主要なルートは中国から、いわゆる西域なる中央アジア、ヨーロッパに通ずるものであった。しかしながらシルクロードの大部分は砂漠地帯、しかも気象の激しい高原帯であって、冬期間はほとんど使えない。

昔はラクダの背に物資を積んで、大きな隊商（キャラバン）を組織して砂漠を踏破しオアシスすなわち砂漠島といわれる緑化地から次のオアシスと移動し、そこで市場を開いて交易をした。中国からは絹、茶、綿布などを運び、ヨーロッパ方面からは、宝石、金属器、その他の生活用具が入って来た。現在、中央アジアのオアシスに発達した大きな都市で開かれている大衆市場のいわゆるバザールは、昔の交易市場の名残と思われる。

現在のシルクロードは世界文明からとり残された、低開発の名にふさわしい荒廃地であるが、かつて繁栄をきわめた跡は、わが国をはじめ欧米各国の現地調査団により発見され、あるいは発掘されている考古学資料が物語っている。

ところで、往昔華やかであったシルクロードの近代の衰退の原因は、海路によるアジアとヨーロッパ間の交易の発達である。一四九二年にコロンブスが大西洋を横断してアメリカ大陸を発見して以来、遠洋航路ブームがまきおこり、ヨーロッパからアフリカ南端の喜望岬を廻り、アジアにいたる航路が開かれた。そこで大量の物資を巨船で運ぶことができるようになり、他方ロシヤの東進がこれに拍車をかけ、砂漠地帯で物資が乏しく行動が困難、さらに季節的制限のある緩慢なシルクロードによる交易は急激に衰微してしまった。

さて、第二次世界大戦の後におこった、ソ連と中国の間の国境に関する紛争が深刻になってからは、シルクロード特に天山北路の名はあっても交通は杜絶状態で、調査は不



○は訪れた中央アジアの都市

可能である。中国にとってもソ連にとっても、その領内の中央アジア地方は辺境で、行政的にはそれぞれの国が統治していてもその文化の影響はここまでは十分に及んでいない。ソ連は近年は中央アジア共和国の観光に力を入れ出し宣伝をしているが、国外からの現地調査などは現在のところ、まず不可能である。従ってアフガニスタン、イラン、イラクの視察、あるいは調査に比較したら、天山北路にあたるソ連領内のシルクロードに関しては極めて皮相の観しか得られない非難は認めざるを得ない。

ソ連内の旅行や視察は、特別な場合を除いて、すべて国営の交通公社インツーリストが管理し、その計画に従がうことになっていて、自由な旅行は許されないが、欲を出さない限り旅行は容易である。

中央アジアの諸共和国を訪れたのは、一九七四年の六月の中下旬である。モスクワからは鉄道があるが、何日もかかるからソ連機のエアフロートジェット機で、超高度で四時間飛んで、中ソ国境に近いアラマアタに着いた。緑濃いモスクワを離れて南に向かうに従って下界は一面の淡褐色の砂漠で、やがて一塊の緑地が眼に入り、着陸したらアラマアタであった。ここはカザフ共和国の首都で、昔はシルクロードの一角をなしたところである。

アルマアタは、もちろん砂漠の中のオアシスである。ところが、われわれが昔教科書で習ったアフリカの砂漠のオアシスとは、似てもつかない大緑地帯であった。その町は幅が十キロ、長さが二十四キロで、人口は百万に近い大都市である。ホテルも住宅も店舗も、欧米の近代都市と変りがない。町中には樹令数百年の巨木がいたるところにあって、昔のシルクロードの華やかであった頃の面影が偲ばれる。

しかし、ソ連は近年ここを観光都市にする計画を進めているから、前には蒙古系やアラブ系など東洋系の人間がいたというが、市中では大部分がソ連人で、東洋人はほとんど見られない。

アルマアタには、ソ連随一といわれる哺乳動物研究所がある。主として中央アジア産と蒙古産の動物標本が集められていて、ヒョウはいるが、トラがいないことなどを知ったが、標本の種類や数が豊富であるのに比較すると、建物がお粗末過ぎる感がある。市中には動物園もあるが、他国産の動物は極めて少ない。

アルマアタの市中からも、東の紺碧の空に六千メートルから七千メートル級の国境の天山山脈の山々が、真黒い岩肌と氷河と白雪に輝いて迫っているのが見える。この山脈の氷と雪が、アルマアタのあるオアシスの水源である。市中には噴水もあって水は極めて豊富であるが、日本の国土と違って、山々には水源をなすほどの森林が見当らない。天山々脈の雪と氷が解けて谷を流れ、それを中心にオアシスが発達したのである。

中央アジアの広大な砂漠の上空を吹き流れてくる雲が、天山々脈の高峯にぶつかって雨を降らし雪を降らし、氷河が形成されたもので、これが森林のように保水作用をなしていることを知った。アルマアタは北海道と同じ緯度にあるが、標高は千メートル、砂漠の中だから昼間照りつける日光は強烈で、六月中旬には気温は四十度を超え、帽子なしには外を歩けない。しかし日没からは肌寒さを感じ、典型的な大陸気候である。

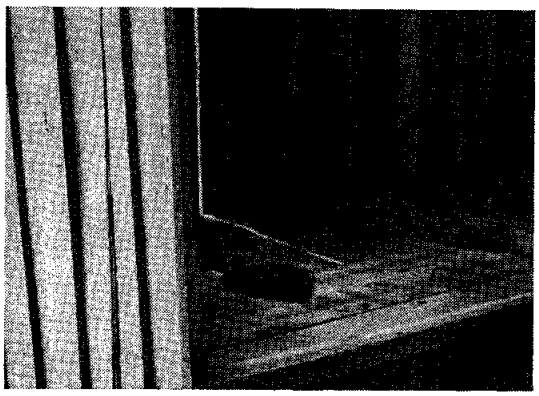
アルマアタから天山々脈の渓谷に向かう二つの観光ルートがある。その一つは山脈に向かって左側のマーロエアルマアタ渓谷で、川の水は少ないが上流にダムが作られ、そこにはスポーツセンターや食堂があって、冬期間はスケートが盛んだという。しかし、そのほかに売店が二戸あって飲物を売っていたくらいで、観光施設はなく、蒙古系の者が野外で炭火でブロイラーを焼いていた。ここの公衆便所を見て驚いたことは全く原始的で、幅広い板に五個並んで穴を開けただけで、その間にしきりが何もない。ソ連はこ

こを観光地とする計画だが、施設にはまだ十分に手が廻らないらしい。

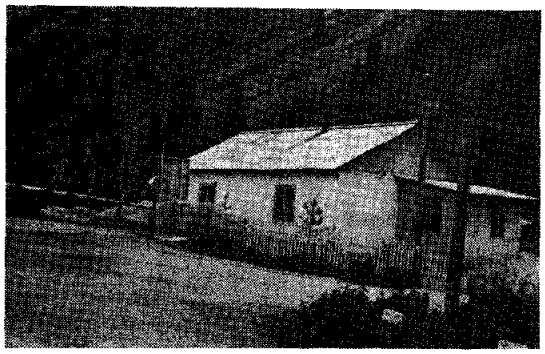
もう一つの左手のルートは、入口の幅が十キロ以上もある大きな渓谷で、上流五十キロまで車で行くことができる。渓谷の中心を流れる川の水は清く豊富で、アルマアタ市の主な水源をなし、その両側はよく緑化された農地で、ウシ、ウマ、ヒツジの放牧も見られる。しかし両側の丘陵は、草木のまばらな半砂漠である。

谷が狭まるに従って、若干のスギに似た立木が出て来て草木が多くなり、その中には日本の高山植物に似た美しい花のものが多い。

渓谷の絡点には十数軒の別荘風のバンガローがあるが、人影が少なく、一軒の純ロシヤ式家屋があって、老人と子供がいてウシ数頭とヒツジ、ニワトリとミツバチを飼っていた。ここにはソ連の造林事務所があったが、渓谷の両側には山崩れの跡が多く、ソ連では緑化に力を入れているらしい。この絡点には湖の跡がある。かつては湖があって有力な貯水場となっていたが、一九六三年の七月のこと天山々脈に例年になく暖い雨が降り雪と氷河が一時に大量に融けて洪水となって湖に流れこみ、湖の出口が決壊し、二百メートルにも及ぶ崖崩れをおこし、下流は大洪水に見舞われ、溺死者が十数人出たという。



アルマアタ観光地の公衆便所の内部



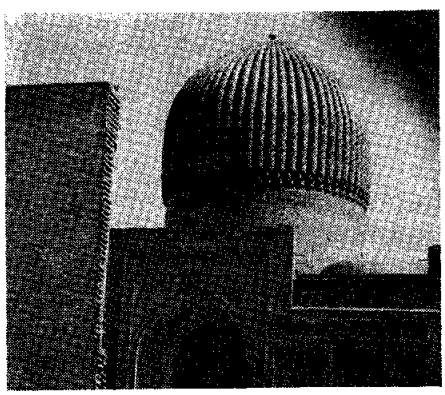
アルマアタの渓谷のロシヤの家

アルマアタの市中では、昔の建物を探すのは容易でない。というのはしばしば地震があって、多くの家は破壊され、ソ連政府は約十年前までは四階以上の建物の建築を許さなかったほどである。

アルマアタから西に、双発のプロペラ機で砂漠の上を飛び、隣りのキリキズ共和国の首都のフルンゼに出た。ここもオアシスの町であるが、シルクロードの一拠点で、往時は非常に栄えたことで有名である。現在は人口は約四十万であるが、ソ連が誇りとしている森の都である。街路樹をはじめとし、いたるところに樹令数百年の巨木が茂り、家々は樹々の間にあるといった感じの町である。

草花は割合に少ないが、町の中には三百種以上の植物があるといわれ、新植された若木の街路樹があちこちに見られ、樹木による緑化に努力している跡が、はっきりしている。ところどころで樹幹にリスの給餌器が吊るされているのも珍しい。久しぶりでスズ

フルンゼのバザールの一部（人参売り場）



タシケントのモスク

メを見たが、野鳥はあまり多くはない。

アルマアタに比較して、大衆の中に東洋系の人が多いことに気がつく。市中にある動物博物館、考古学博物等は内容は素晴らしく充実していて、この地方の華やかな歴史を物語るに十分なものがある。ここで、かねてから文献で知っていた突厥時代の石人（石像）を十数個見た。六世紀から八世紀にわたる作である。多くの貴重な資料が所蔵されているのに、案内書などがないのは残念であった。だいたい、ソ連ではモスクワのような大都市でも、絵葉書などは極めて少なく、観光土産のためばかりでなく、学術的にも参考にしたいものが多いのに惜しいことである。

フルンゼに来て、はじめて昔のシルクロードを偲ぶ待望の大バザールを見物できた。町の中には小規模なデパートもあるが、商品はむしろ貧弱で、顧客も少ない。これに反してバザールは盛況をきわめ、全く雑踏の巷で数千の人が殺到し、静粛な町中に比較して別世界の感がある。

バザール（市場）は毎日午前八時にはじまり、午後七時まで開かれている。町はずれにある蒙古風の派手な画模様をつけた大きな門を入ると、数十列の平屋の露天式建物がならび、間口が十メートル前後が一戸分で、売り子は一人のこともあり、一家族のこともある。

売っている品物は、主として日用の食料品で特に新鮮な農産物が多い。ソ連の政策として農家は原則的には、コルホーズ（集団農場）やソホーズ（国営農場）で働かなくてはならず、その生産物は国に提出されるが、近年は農家一戸につき〇・五ヘクタールの自由耕作が許され、その生産物は自家用にし、また自由に販売することができる。このような物がバザールに出されて、現金収入のもとになっている。だから売値は割合に高い。しかし交渉次第で値引きもする。

フルンゼのバザールで人波を押しわけて一通り歩いて驚いたことは、モスクワでは店頭に見当らず、また入手が極めて困難な、新鮮な野菜や果物がふんだんに出されていることである。まずサクランボウ、イチゴ、トマト、リンゴ、アンズなどがずらり並べられている。モスクワに滞在中は果物は稀にオレンジを特に頼んで食べる有様で、果物に恵まれている日本人の悩みの一つであったが、どうしてこの地方にこんなに豊富なのにモスクワに送られないのか不思議に思った。

野菜には生々しいキャベツ、白菜、ネギに大根さらに人参、赤カブ、キュウリ、馬鈴薯、ニンニクがあり、中国式の野菜の漬物もある。乾燥地帯であるから、その特産部の干ブドウ、干アンズ、干プラムなどが山と積まれていた。路傍には蒙古系の子供が一人コップにキイチゴを一杯盛って立ち売りしていたが、おそらく山で採集して来たものと思われる。ところでバザールでは同じような品物を何個所でも売っていて、ソ連のような統制が強化されている国にしては奇妙な現象に見えた。

フルンゼの町の人々は日用の食料品は、ほとんどバザールで買い求めるらしく、買手の中にはソ連人の主婦らしい婦人が多く見られた。しかし売手の大部分は蒙古系の者であったから、町の周辺には東洋系の住民が多いことが察せられた。

フルンゼは緑の森のオワシスの町であるが、その周辺は広漠たる大砂漠である。しかし天山々脈の支脈が四十キロほどの近くに迫っていて、ここがフルンゼのある溪谷の大事な水源をなしている。市街を出て川の流れのある、なだらかな丘陵の間を天山山脈に向かえば、丘陵地は若干のラクダ草などの乾地性植物のあるいわゆるステップであるが川の両岸は農地で、菜種の黄色い花が咲き、小麦、馬鈴薯、玉蜀黍、アルファルファなどの畑がある。しかし、まだこの溪谷には未開地が相当にあって、一部では農夫が手道具で溝を掘り、土地改良をしていた。砂漠地帯は一般に土壌には多量の塩分が含まれ、耕作に適しないため、ソ連は塩分を除く技術に力をそそぎ、ある程度成功しているという。ここで農夫が未墾地に盛んに水を導入しているは、その技術の一つかと思われた。

フルンゼから車で、仮舗装の乾燥した快的な道を約一時間走ると、溪谷の終点に達する。その途中の貧弱な草地には、ところどころにウシやヒツジの集団放牧が見られ、土造りの家の集団が二、三カ所あったが、道のすぐ傍に珍しくも完全な蒙古パオが一つあった。蒙古系の年寄り夫婦と子供が三人の家族で、心よくパオに入れてくれた。中は奇麗に整頓されていて居心地よく、炊事は外でするようになっていた。パオの傍に二十メートル四方ほどを柵で囲い、ウマとブタが飼われ、ニワトリが数羽放飼されていた。この家族は、冬にはフルンゼの市街に移るという。

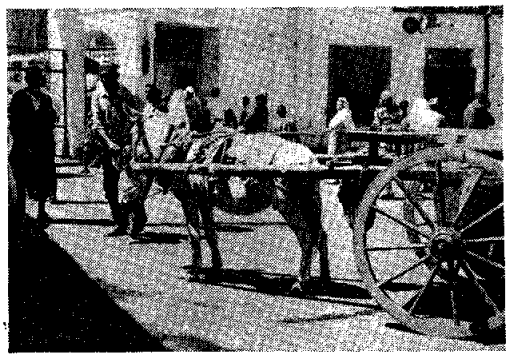
溪谷の終点はすなわち天山々脈の支脈直下の山麓で、幅が五メートルほどで深さが四十センチほどの手の切れるような冷たい清流がある。天山々脈の黒い岩壁に氷雪を戴いた高峯が谷間におおいかぶさるように迫っているから、この水はその雪融け水であるこ

とは明らかで、近くの山肌には若干の広葉樹と針葉樹の立木があるが、水源をなすほどの森林はない。

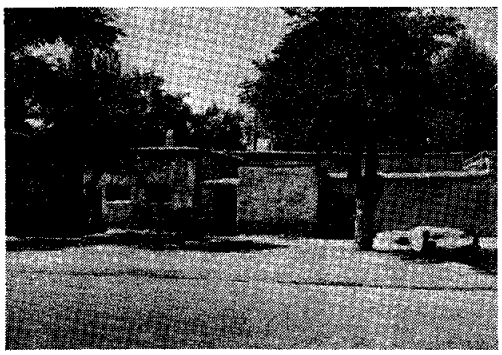
ここは天山々脈の登山口になっていて、登山講習や登山訓練もされるよし。そのための近代的建物や、山岳気象の観測場があって、若干の若いソ連人が忙しく立ち廻っていた。この附近にはナキウサギやモルモットが住み、クマも現れ、モルモットを襲って食べることがあるという。

次にフルンゼからさらに西に砂漠の上をプロペラ機で一時間ほど飛んで、隣のウズベク共和国の首府タシケントに出た。人口は百四十万の大都市で、戦後に多数の日本兵の捕虜の送りこまれたところである。タシケントには十数年前に何回も強烈な地震があって、多くの建物が破壊されたというが、現在はほとんど復旧されている。

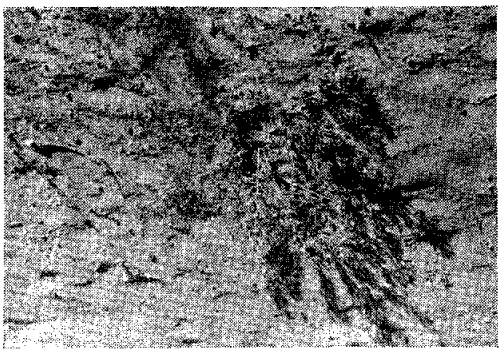
タシケントはもちろん往昔のシルクロードの要所であったが、ここに来て中央アジア独特の昔の文化を物語るいくつかの古跡を見ることができた。通称モスク（寺院）と呼ばれる古代建築物が、地震でもあまりに破壊されずに残っている。モスクはイスラム教に関係するものが多く、王公貴族の墳墓、礼拝堂などで青を多く使った美しい化粧レンガで飾られ、紺碧の空の色とよくマッチしている。大きな石を使った古城の跡もある。



プハラのバザールの近くで



プハラの民家



プハラのステップに生えているラクダグサ

市中にある小さい博物館は、建物は貧弱であるが、内容は充実し、眼を欺くばかりのあでやかな絨毯が、どの室にも壁一杯に飾られ、往時の華やかな文化の跡が偲ばれる。一般の現地住民の生活はどちらかといえば、近代の物質文明から遅れていることは否定できないが、この地方にはそれと異なった方向の素晴らしい文化の発達があったことが物語られている。

タシケント市内の大きな近大劇場は、日本の戦争捕虜の手で建てられたことは有名である。地震で一部は破壊されたというが、修理されていた。住民の中には蒙古系の顔が相当に多く見られ、日本人に対してヤポニヤといって近親感を持ち、市中でさよならという日本語を久しぶりで聞いた。タシケントのバザールは、フルンゼに比較して規模は小さく、品物の種類も量も少ない。

タシケントホテルは完全なヨーロッパ式で、外人向きの売店にはアルマアタやフルンゼのホテルに比較して、土地の民芸品をはじめとし、記念品を豊富に売っていて、ソ連の積極的な近代化政策の様相がうかがわれる。

次はタシケントを後に、同じウズベク共和国の南端に近いプハラに向かった。やり双発のプロペラ機で多くの蒙古系の乗客とともに砂漠の上を一時間半飛んだが、割合に低空であったから砂漠の状態をよく観察することができた。

砂漠には大きな波のようになっていくつかの砂丘が連続し、ところどころに真青な水を湛えた湖がある。その色合いから明らかに濃厚な塩分を含んだ水で、飲料に適しないものと思われる。稀に水分が蒸発して白い塩分だけが残る湖の跡もある。天山々脈は遠くなり、プハラはどこまでも続く平坦な砂漠の中の町であるが、シルクロード

の要所であったことは有名で、ここまで足を延ばすことができたのは幸いであった。

プハラはこれまでの都市と違って水に恵まれず、遠くのゼラフシャン川から砂漠の中をシャー・ルード運河を通して給水している。だから町の中には樹木は少なく、ホテルの用水は時間的に制限されていて、風呂にも思うように入れない。ホテルはヨーロッパの都市の二流級だが、庭にある外便所は旧式な原始的なもので、不潔そのものである。町には近代的建築物は少なく、民家は土造りが多く、土塀に囲まれ、民衆の服装は東洋風で、日本人そっくりの顔を見られるには驚いた。

町の地味な土色一色の民家とは対象的に、色彩のあざやかな化粧レンガで装飾された壮大なモスクがあちこちにある。その中でもアルクと呼ばれる古城には、高さ四十メートルのロウソク型の尖塔が立ち、淡赤色と青色のレンガで中央アジア特有の模様がつけられ、雲一つない青空に高原砂漠の強烈な日光を浴びてさんらんと輝き、九世紀から十世紀にわたる中央アジアの華やかな文化の跡を残す。プハラで最も古いといわれるモスクは、数人の者が修理中であったが、頭に白いタアバンを巻いたアラブ系の一人の老人が静かに屋内に入って来て、大きな室の床に坐り、しきりに礼拝をしていた。

町往く人のおよそ半分は洋装で、あとの半分は蒙古系服装かアラビア系の服装で、子供は裸足の者が多い。町から一キロほど離れて、道もない砂地に中型のモスクがある。中心部にかつての王者の石の柩がおさめてあったが、番人は誰もいない。シルクロードが衰微してからは、窃盗団が盛んにモスクを荒らし、墓を発き宝物を持ち去ったから、現在は柩はぬけ殻のような物らしい。

このモスクの近くの草のまばらにあるところに七、八人の子供が遊んでいて、近寄るとニポニヤといいって懐しがって集まって来て、気軽に写真をとらせた。子供達は各々二、三頭のヒツジを連れて来ていて、草を食べさせていた。このヒツジはカラクールで、中央アジアが原産地である。このヒツジの産まれたこの子の毛皮はヨーロッパでは高級毛皮として流行しているもので、カラクールとかアストラカンとか、あるいはペルシャン（ラム）と呼ばれ、ソ連の財源の一つである。この地方の住民はその肉を利用し乳を飲むなど大事な生活資源でもある。

プハラの町には自動車もバスやトラックも極めて少なく、馬やロバに乗った者も見られ、ソ連の近代化政策もこんな辺地にはまだ十分に及んでいない状態である。町の一部には団地式建物を建設中であるが、そこで満足して生活する住民がどれほどあるか、疑問に思われる。

プハラのバザールは非常に盛んである。原始的な面影が多分に残っていて、ここで何時間費しても飽きない状態であった。売物は農産物が主であるが、生きたニワトリを一羽抱えて売り歩く者、血の滴る子ヒツジのむき身（毛皮をとった後）を吊してあるなどは、ほかのバザールでは見られないものがあった。

プハラのバザールの特徴は、バザールの外の街路の両側に、三百メートルほども続いて、衣料品原料や既製品の露天がぎっしり並び、その間に手製の白木の煙草のパイプを五、六本ならべて売っている者もあり、人々の雑踏をかき分けて馬車を乗り入れ、ロバに乗った者も入りこみ、昔のシルクロードのバザールはこうであったかと思わしめるが自分があたかもその時代にいるような錯覚さえおこさせる。もちろん、自分をよそ者として見る者が一人もいないからでもある。

人ごみの中を写真をとって歩いていたら突然、高級車に乗って来たソ連の紳士が現れ写真機を見て、日本でいくらで買えるかと聞くから、ソ連のルーブルでこれくらいといったら、その倍出すから売れという。これから先々の旅行があるから売れないと断わったら、三倍ならどうかというが、固く断わった。後で知ったが五倍で買ってもまだ儲かるというが、売ったらソ連の国内法に触れるかも知れない。

モスクワのインツーリストに交渉して貰い、特別許可でプハラの町からはるか南の国境近くの、人手のあまり加わっていない砂漠地帯の見学の機会を得た。特別雇いのバスで砂漠の中を一時間半ほど走った。道路は舗装されていないが、固くてあまり砂ほこりも立たない。途中ではコルホーズらしい土造りの家の集団が数カ所見られ、また砂漠の中を群団で移動しているヒツジも見られた。

バスを降りて見渡す限りの砂漠の中に踏み入ると、若干の小石の混じる砂地で、ぬかることなくどこまでも歩ける。もちろん邪魔になる物はないが、数メートル置きくらいにばらばらに多少葉緑素を持って飼うようになった乾地植物があって、ここは砂漠というよりむしろ、いわゆるステップであった。ヒツジの糞がところどころにあるから、こんなところでも生活できるのが不思議であった。

ところが歩いていると土色をしたトカゲが逃げ出したり、稀にツチリスの穴もある。

同行したドイツ人は、直径五センチほどの亀の甲を拾って来たし、自分はフンコロガシの甲虫も採集した。おそらくこのステップは、アフガニスタンからイラン方面までも続いていると思うと、感慨無量であった。

プハラからこの紀行最後の都市、サマルンカンドを訪れた。ウズベク共和国内にある二千五百年の歴史を持つ古都で、シルクロードの要所として有名で長く中央アジアの文化の中心地であったが、現在は近代化が進み工業の発達も目覚しく、昔の面影は道行く東洋系の住民や、若干のモスクとバザールに見られるだけとなった。プハラからは東方に逆行してプロペラ機で一時間で達するが、モスクワへの直行便がひん発し、四発のプロペラ機で六時間でモスクワに着く。

なお、ソ連内の旅行は前述のように、国営の交通公社インツーリストが扱い、旅行のルート、飛行機の発着、宿泊ホテルなどがここで定められ、多くの場合、前金払いで切符が渡されるから旅行者には非常に便利である。しかしホテルの変更とか、ルートの変更はよほどのことのない限り、容易なことではない。要するに、自由勝手な旅行はできない。

われわれのこの度の旅行は、モスクワで開かれた国際哺乳動物学会（一九七四年六月）の後の見学旅行で、一行は日本人五人（西脇、根本、小原夫妻と私）とドイツ人、ユーゴー人、オーストラリア人、マレーシヤからのイギリス人の十八名で、モスクワからはナターシャという若い婦人で英語の達者な者が最後まで通訳兼案内者として行動を共にし、ホテルから交通機関に関する一斉を一人でやり感心した。さらに現地の予定都市に着くと、その土地に詳しい案内者がナターシャの補助として加わった。いずれも英語の達者な者で、タシケントではそこの大学を出たという青年の案内者で、相当なインテリであった。

（北大名誉教授）